

幼児理解が支える保育指導計画

田澤 薫

キーワード：幼児理解、アクティブラーニング、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領

1. はじめに

前稿「幼児理解と児童学の可能性」¹⁾で筆者は、聖学院大学児童学科の幼稚園教職課程において初年次に「教職課程の幼児理解の理論と方法論の初歩」を学ぶ経緯を述べ、この後多くの専門科目で児童の心理や発達を学び、そして各学外実習が配当される時期を迎えた3年次の春学期に「幼児指導法の研究」(免許法の科目名「幼児理解の理論と方法」)を学ぶ意義の検討を次の課題とした。

2016年度春学期、筆者は「幼児指導法の研究」を担当する機会を得た。この科目への期待として、前稿では「個々の幼児や幼児集団の、遊びや生活場面の事例を用いて受講生が協同して検討し、まず発達を確認すること、次いで個々の子どもを知ろうとすることに取り組むことで、気づきを言語化して相互に伝え合ったり、さらに文章化して記録しその省察を経て後の保育の展開を模索したりする取り組みが可能になるだろう」²⁾と記した。その実際はどうであったか、個々の幼児の姿に照らして幼児理解の理論と方法を学ぶ授業の実践として検証したい。

2. 授業のねらい

シラバスには、授業の内容として、第1に「児童学概論」と「児童文化論A」(とくに、遊び、子どもと食の单元)等で学んだ児童理解を基盤としながら、乳幼児の各年齢・月齢ごとの一般的な発達の姿を理解したうえで、特性をふまえた一人一人の幼児の姿を理解し、人と人として幼児と向き合える理解基盤を身に付ける」という初年次からの積み上げ科目であること、第2に「幼児理解を

踏まえて、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を手がかりとしながら保育の場での保育実践や幼児指導の手法を理解し、具体的に自分でどのように関わるのか、言葉かけや振る舞いができるようになる」という教職課程における指導法の基盤形成を目的とすること、第3に「幼児に対する保育者の関わりを記録化し、省察し、保育内容を振り返り、その作業を通して保育内容を高めていく方法を身につけて学ぶ」という保育の本質に関わる力を養成することを明記した。そのうえで「学びの意義と目標」として、「年齢・月齢ごとの一般的な幼児の発達を理解する」「一般的な発達理解をふまえた個々の幼児理解の手法を身につける」「個々の幼児理解を基盤とした保育実践を具体的に考えられる力を養う」「幼児の姿を記録化し、省察することで保育を高めていく方法を理解する」と段階を踏む4事項を示し、これらに沿って授業を組み立てた。

初回授業では、本授業では幼稚園教育実習で出会う幼児をしっかりと理解し保育指導計画案を立案できる力を保障したい、とねらいを明確に伝え、積極的かつ主体的な参加を呼び掛けた。

3. 授業におけるアクティブラーニングの内容

授業の展開を振り返ってみたい。

「指導案を書けるようになる」という明確な目的を共有した受講生集団がどう力をつけていくのかは、興味深いアクティブラーニングの主題である。丸山が述べるように³⁾、アクティブラーニングは単に「活動的」に体験学習することではなく、「学修は社会的な営みであり、実社会でも知識は相互作用により深まる。だから学び合い、教え合うことでより確かなものになる」という学修観をもって、各人が主体的に自分の力をつけていくときに成立したとみることができだろう。

先述の通り、求められている仕方に参加をすれば必ず幼稚園教育実習で求められる保育指導計画案を立案できる力がつくことを保障する、と最初に言い切った一方で、「求められる」準備として、毎回かなりの予習を提示した。初回はほとんど全員が取り組んでいなかったが、授業の内容を濃くし予習をして臨む方が理解できることを実感して後は、回数を追うごとに予習者が増加し、最終段階ではほとんどの学生が予習をして参加し、授業内で手ごたえを得、目に見えて力をつけていった。

回	含まれる学修内容（予習から教員のレスポンスまで）
1 幼児理解の姿勢と方法	<p>内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業15回分のワークシート・資料の内容を確認し、授業の具体的な目標を知る。 ・授業への参加の仕方の説明を受け、①事前学習、②授業中に行うこと、③事後学習の方法を理解する。 ・教科書「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の概要を確認し、事前学習に取り組む際の活用方法を具体的に知る。 <p>アクティブラーニング的活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに保育内容の五領域を記入する。 ・「保育所保育指針」より「第三章 保育の内容 1 保育のねらい及び内容（一）養護に関するねらい イ情緒の安定」を読み合わせ、ワークシートに、魅かれた表現を書き出すとともに、それを実現するために自分に何ができるか、何をしたいか保育実践を具体的に考えて書く。 <p>レスポンス：一人一人のワークシートに教員がコメントを記す。</p>
2 0・1歳児の	<p>予習：保育所保育指針をよく読んで、0，1歳児の発達特性を書き出す。自分が該当年齢の乳幼児の保育を行う場面を具体的に想像し、①五領域それぞれについて「どんなことに気を付けたい、どんな保育をしたい、どんな関わりをしたい」のかを考えて記す。②適</p>

発達特性と子どもの姿	<p>した絵本を探し、保育で使用する際の留意点を書き出す。③適した手遊びを考え、保育で行う際の留意点を書き出す。</p> <p>内容・アクティブラーニング的活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・DVD教材「考える力・意欲・関わる力が育つ保育」（社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 2012 新宿スタジオ制作）を使用し、保育所における0，1歳児の姿、他児や保育士との関わりの様子を視聴し、気付いたことを確認することを通して、該当年齢がどのような時期なのかを改めて押さえるとともに、この年齢の幼児に自分が保育者として気持ちを向けたことを考えて文章化する。 ・絵本『いない いない ばあ』（松谷みよ子作、瀬川康男絵 1967 童心社）を読み合う。 <p>レスポンス：ワークシートを閲読し、コメントを付して翌週の授業前に返却する。温かな気付きや乳幼児の側から理解しようとする姿勢が顕著に表現されている箇所に花マルを付すなど、望ましい記述を支えることを意図し、受講生が、自身の気付きが保育者として適切なかどうかを判断できるようなコメントを心掛けた。</p>
3 各年齢の発達特性と子どもの姿	<p>特記事項：</p> <p>予習：3歳児以降で「幼稚園教育要領」併用</p> <p>6 ・絵本の読み合い活動：</p> <p>2歳児『ノントナンぶらんこのせて』（キヨノサチコ作 1976 偕成社）／3歳児『ぐりとぐら』（中川李枝子作 大村百合子絵 1967 福音館書店）</p> <p>DVD教材：3歳児以降で「3年間の保育記録」監修神長美津子・小田豊 岩波映像）を併用。</p> <p>指摘事項：「3歳児」の授業で、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「3歳児」を軸に幼稚園教育要領、保育所保育指針を比較し、要領と指針の性質の相違に気付き、両方の特質を踏まえて併用し

	<p>て学ぶ方法を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さらに、幼保連携型認定子ども園保育・教育要領とも比較し、幼保連携型認定子ども園特有の保育の課題を理解し、幼保連携型認定子ども園の保育の可能性についても具体的に理解する。 ・幼稚園と保育所の安易な比較に終わらず、集団保育を経験して4年目の幼児と初めて集団に入った幼児の経験値の差を読み取り、幼児にとって、発達とは別に、経験や習熟の要素が重大であることを理解する。 ・3歳児が不如意な経験が重なった最終場面で泣く姿を視聴し、子どもの泣きには必ず理由があること、直接のきっかけとなる理由以外に多様な理由が絡まり泣きにつながる場合を知り、子どもの言動の背景を大人は把握し切れていないことを自覚する。
7 発達を踏まえた関わり	<p>予習：0歳～5歳の各年齢について「ほかの乳幼児との関わり」「保育者との関わり」「競い合いや勝ち負け」「じゅんぱんやずる」「じゃんけん」「性別」等の項目における発達特性を考えて記す。何を調べても構わない。</p> <p>内容・アクティブラーニング的活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予習を踏まえて、意見を出し合い、項目ごと年齢ごとに検討する。 ・「手遊び“ぐーちょきばあでなにつくろう”をやるときは?」「お友だちが使っていた玩具をとってしまったときには?」「体調が悪そうにみえるときは?」「一人で遊んでいるときは?」等の場面を想定し、年齢によって、自分だったらどう関わるか、考え合う。 <p>レスポンス：学生間の意見交換に参加し、できるだけ学生の発言を肯定するように聴きながら、適宜、発達理解の適切性、保育の適切性を解説した。</p>

8 保育指導計画の立案	<p>予習：指針と要領の見直し。</p> <p>内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他科目で既習した保育指導案を概観する。 ・「子どもの姿」「本日のねらい」「内容」「時間」「子どもの活動」「実習生の活動」「環境設定」「評価」各欄の順を追った計画案の立案方法を学ぶ。 ・保育指導計画における必然性について理解する。 <p>アクティブラーニング的活動・レスポンス： 説明の各段階で受講生に発言を求め、できる限り肯定しながら、その場で、その発言を基に指導案の事例を編み、演習した。</p>
9 事例の記録化	<p>予習：「基礎実習」の復習。子どもの姿を観察して見取り、文章化する際の留意事項の確認。</p> <p>内容：実践記録の意味、内容、記入時の注意を学ぶ。(半数の学生が保育実習のため欠席)</p> <p>アクティブラーニング的活動： DVDより短いエピソード場面を視聴し、その場面に実習生として立ち会っている想定でメモを取り、保育記録にまとめた。</p>
10 保育実践記録の分析	<p>予習：前回作成した保育記録を仕上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育記録をもとに対象児について考察する。 <p>内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育における考察・省察とは何かを考える。 ・一人一人の幼児の理解を深めるためには、省察が不可欠であることを理解する。 <p>(半数の学生が保育実習のため欠席)</p> <p>アクティブラーニング的活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考察を文章化してワークシートに記し、発表し合い、自分の考察を深める。 ・この作業を通して対象児に対する省察がなされていることを確認する。 <p>レスポンス：場面ごとの考察が対象児理解につながる省察につながる経緯が分かるように、意見発表ごとに講評を行う。</p>

11	幼児との関わりからの気付きと省察	<p>予習：・これまでの学修内容を振り返る。</p> <p>・「保育所実習」のため前々回・前回の授業を欠席した受講生は、実習を振り返る。</p> <p>内容・アクティブラーニング的活動：</p> <p>・保育実習を経験した学生としていない学生数が概ね同数であることから、実習を経験していない学生がテーマを示し（年齢クラスごとの排泄指導の内容、年齢クラスごとの排泄指導時の言葉かけの内容、年齢クラスごとの排泄指導時の時間配分、等）、そのテーマに対して、実習経験者が年齢ごとの様子・状態等を説明する。</p> <p>・保育所実習を経験していない受講生は、保育指導計画案の策定中に生じた具体的な疑問を、実習経験者に質問することで解消した。保育所実習経験者は、「実習した保育所では」と実習先での見聞を発表することで学びを意識化し、また積極的に発言することで自信をつけた。</p> <p>・「指導案立案に関する質問」がある学生は紙に書いて提出した。</p> <p>レスポンス：指導案作成を想定した学生同士の情報交換による授業運営を大切に、学生から提示される情報の妥当性に留意し、全発言に言葉を添え、必要に応じて補足説明した。</p>
		<p>12</p> <p>予習：これまでの幼稚園教職課程全体の復習。</p> <p>内容・アクティブラーニング的活動：</p> <p>・前回の「指導案立案に対する質問」に答えながら、指導案立案の方法を再度確認した。</p> <p>・保育指導計画に必要な視点として「子ども中心」「発達理解」「保育内容としての適切性」「保育教材としての適切性」「幼児理解」「保育の進め方（必然性）」「保育における配慮」「説明の仕方」「時間配分」「言葉遣い（正確さ・適切性・うつくしさ）」「ジェンダーバイヤス等の人権の視点」「危険性への配慮」の各々の項目について理解した。</p>

13・14	事例分析と実践の検討	<p>13回 2・3歳児／14回 4・5歳児</p> <p>予習：保育事例を読み、気付きを書き留める。</p> <p>内容・アクティブラーニング的活動：</p> <p>・「全事例を授業内で扱うのは難しい」として、取り上げる順番を希望の多い順とした。</p> <p>・①事例を音読する。（“気付き”発表に自信のないとして、数人の受講生間で争奪戦になる）、②一人1項目、気付きを発表する、③授業者が発表に対して解説を加える、という方法で事例の読み解きを行う。事前に準備した事例の解説項目はすべて受講生による発表で指摘された。</p> <p>レスポンス：“気付き”の発表を授業者は懸命にノートし、事項の解説に加えて、発表者ごとに「温かい気付きですね」「細やかなところに気付きましたね」等、発言を支える言葉を添えて承認した。</p>
		<p>15</p> <p>予習：3、4、5歳児クラスのいずれかを対象に1日の保育指導計画案を作成し、持参する。</p> <p>内容：試験（指導案を作成した保育施設を想定し、「保育の理念・保育目標」「各領域、各年齢の保育のねらい」を表にまとめ、指導案本日の保育内容を領域ごとに説明する）</p> <p>レスポンス：試験答案是保育指導案（写し）と共に提出し、希望する受講生には、成績評価後に指導案の個別指導を約束した。個別指導希望者は半数超。</p>

4. 検証

上記の授業展開で、ねらいの通り「協同して検討」「気付きを言語化して相互に伝え合う」「気付きを文章化して記録する」「省察を経て後の保育の展開を模索する」ことができただろうか。

① 協同して検討

幼稚園教職の必修科目である本科目の受講生は多様で、開講期の3年次春学期は、受講生の立場

に応じて学修意欲に差が生じやすい時期である。幼稚園教職課程と保育士課程に学ぶ学生群（タイプ①）は通年科目「保育実習」を履修中で6月の保育実習が目前に迫り意欲も高く力もつく時期である。一方で、幼保課程に学びながら単位を取り切れず、実習の履修がかなわなかった学生たち（タイプ②）も少数いる。彼らの中には、意欲喪失気味の人もおり、保育実習を控えた仲間に対して複雑な感情をいただいている場合もある。幼稚園と小学校の教職課程に学んできている学生群（タイプ③）もいる。彼らは同年秋に小学校実習を控えており、現場実習への緊迫性や指導案立案の力をつける必然性には敏感であるが、どちらかという小学校教師の夢を持っている学生が多いので、幼児への関心が強いわけではない。最も配慮を要するのは、幼小課程に学び、単位取得状況や学業成績等の事情により小学校教職課程を諦めざるを得なかった学生たち（タイプ④）である。彼らは、4年の幼稚園実習が唯一の実習となり、タイプ③同様に幼児に強い関心を持っているとは限らない。各タイプは、互いにコンプレックスも遠慮も自負もあり、必ずしも協同しやすい状況ではない。

本授業では、タイプ②、タイプ④の受講生の自信回復と幼児への関心の醸成を意識しながら、学生が相互に情報を交換しあうことで互いの良さを実感できるようにすることもねらいの一つとした。

6月半ばからの保育所実習期間は、もともと幼小課程に学び保育士課程の実習が関係のない学生たち（タイプ③④）と実習に行けなかった事実葛藤のある学生（タイプ②）が出席する。出席を勧奨するために、事前に、「保育実習で出席者が減少する期間は、「保育実習指導」の授業で扱う内容と同じ「実習日誌の書き方」を学び、「保育実習指導」の授業で使用したのと同じDVD映像を視聴したうえで実習日誌の書き方の演習を行い、今年度の実習を行わない人も来年度の幼稚園実習で困らない力をつける」と説明しておいた。さらに、保育所実習期間の授業は、出席者が減少すること

を逆手のとり、DVD視聴を経て「気付き」をメモしたあと、全員が発言し、授業者から承認され（まれに承認できない発言内容の場合は、やりとりを繰り返し、承認できる内容を引き出した。すでにDVDを用いた発達理解の積み上げがあるので、最終的には全員が日誌に書きとる価値のある「気付き」を得て、それを言語化することができた）、全員が、日誌を書くのは大変だが頑張れば自分もできる、という実感をもてたと見込まれる。これは、大きな自信と意欲を生んだと思われる。

保育所実習が終了して、また全員が出席できるようになった＜第11回＞の主題は「幼児との関わりからの気づきと省察」である。3歳、4歳、5歳と順を追って、保育所実習を実施しなかった人から質問をし、保育所実習経験者が現場実習で幼児と関わる中で収集してきた情報を「私が実習した保育所では…」という形式で発言した。

すでに保育指導案の立案に関する概要は学び、最後の試験には自分で立案した指導案をもって臨む問題が出題されることは説明済みだったので、自分の指導案をイメージしたうえで、具体的な事柄の不明点について、現場経験者に学ぶ機会とした。「じゃんけんを3歳、4歳、5歳はそれぞれどのように遊びのなかで用いていたか」「排泄のための時間は3歳、4歳、5歳でそれぞれどのくらい設けていたか」など、具体性の高い質問が続き、実習経験者は積極的に報告していた。自分の考え、自分の実践ではなく、保育所での取り組みから見知ったことを情報として伝える発言であることが気持ちを楽にさせているようで、活発で詳細な内容が多く、またそれを聞きながら熱心にメモを取る受講生の姿が発言者を勇気づけ支えた。

② 気づきを言語化して相互に伝え合う

DVDや絵本、事例等の教材から気づきを得る際に、周囲の学生（着席は任意のため、自ずと気心の知れた仲間）同士で言葉を交わす時間を取ったり、取らなかったりした。

自分の気づきに自信を持ってない場合、気心の知

れた仲間につぶやき承認されることで自信に代わることはよくある。つぶやくこと自体に意識を向けることができれば、自然なつぶやきを言語化の営みとして意識化することにもつながる。一方で、常につぶやく機会があると、承認された内容でないと自信がもてないことが起こってくる。自分自身の気づきに自分で向き合い、それを表出できることを授業のねらいにしたい。そのためには、事前には誰にも話すことなく、自分自身の中での自問自答を経て言語化する経験も必要になる。

その双方を授業内で取り入れ、時々授業の内容を振り返って、受講生自身が取り組んできた事柄を解説することで、自分の気づきを仲間と協働して言語化できたこと、気づきを自問自答の末に言語化できたことに対して、自覚できるようになる。

③ 気づきを文章化して記録する

同様に、気づきを、発言してからワークシートに文章化したり、まずワークシートにメモ書きしてから発言を促したりした。文章を書くことに苦手意識を持っている人の場合、まず自由に発言してその「言語化」の力を自覚し、次いで文字化の作業に取り掛かることが有効である場合は多い。一方で、気づきをメモ書きし、文字情報で自分に返すことなかで気づきが深まることも体験してほしい。現場実習では、多くの場合、一日の実践を終えて記録を書く段になって、記録を書きながら、省察が進むからである。

授業の終盤、事例の読み解きの授業回には、気づきを書き出しておくところまでを予習で課した。他者との対話を経なくても、自分に向き合うなかで気づきとその文章化が自然にできる力がついたことを、授業者が指摘して喜びあった。

④ 省察を経て後の保育の展開を模索する

2、3歳児の事例を扱った＜第13回＞授業は、「これまでに学んだことのまとめ」であることを伝えてから臨んだ。学生による音読の後で、気づきの発言を求めたが、発言は自主的で活発であった。全員が発言を求められることを経験から知って

り、序盤に発言したほうが予習を活かせることから、発言の先を争う挙手が続いた。

続く＜第14回＞は、前回と同じ要領で、4、5歳児の事例を学んだ。発言の積極性に変わりはなかったが、前回が予習してきた内容を表出することに発言の意義を見出している人が多く見られたことから転じて、他の学生の発言を聴き、そこから想起して「今の発言に関連して」と挙手する学生が目立った。授業内で互いの学び合いが成立していることを超えて、同じ課題に関心を持つ保育者・教師間で児童のことを語らうなかから省察が生まれる例がまさに実現しており、その都度、学生の中に生まれているその様相を解説した。

授業終了時においては、間違いなく幼児理解の力をつけ、幼児と向き合って何らかの「理解できる」実感を持たせた自信が、学外実習で出会う幼児の姿を楽しみに想像する意欲を生み出し、難題である保育指導計画の策定に臨ませた。来年度に彼らが幼稚園教育実習において幼稚園の現場に出ていくとき、1年前に培った力が定着し機を得て発揮できるかどうか、その真価が問われるだろう。

注

- 1) 田澤薫「幼児理解と児童学の可能性」聖学院大学総合研究所NEWSLETTER25-3 2016
- 2) 田澤薫、前掲
- 3) 丸山綱男「現実社会と接続した大学教育の「社会人基礎力（学士力）」育成の一考察～アクティブ・ラーニング型授業による社会人育成の質的転換を求めて～」2016年度＜児童における総合人間学の試み＞研究会第2回、2016.8.29報告

(たざわ・かおる 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授)